様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５２７

研究課題名（和文）言語コミュニケーションにおける場の理論の構築：近代社会の問題解決を目指して

研究課題名（英文）Construction of Ba Theory related with Language and Comunnication:strive toward solution of modern society problem

研究代表者
大塚　正之（Otsuka, Masayuki）

早稲田大学・法学学術院・教授

研究者番号：４０５５４０５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、言語コミュニケーションにおける場の理論を構築することを目的に研究を重ねてきた。これまでの言語学は、言語の語られる具体的な場から、語られた音声だけを取り出して、その音声配列などを研究対象としてきた。これに対し、言語コミュニケーションにおける場の理論では、言語を、それが話される場にある音声の抑揚、身振り手振り、表情、話し手と聞き手の関係性、知識、立場、状況、話し手らの記憶に保存されているその言語に関係する様々なエピソードなど、あらるゆ非言語的な情報（場の情報）との結びつきの中で言語を捉える。
この研究で、場の情報と密接な関係性を持って、言葉の意味が決められていることが分かってきた。

研究成果の概要（英文）：The purpuse of this study has been the construction of Ba Theory in Language and Communicaition practices. Previous studies in Linguistics have been investigating language without paying attention to concrete Ba where the language is spoken. In contrast, our Ba theory in Language and Comunnication practices considers language as the entity which includes all non-linguistic information (information of Ba) such as intonation of speech, gesture,gesticulation,expression,relationship with speaker and hearer,knowledge of the participants, grounding,situiation, and various episodes which are conserved in our memory. This study finds that the meaning of language is decided with deep relation of information of Ba.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：Ba theory　場の言語学　場の理論　複雑系　自己組織　同期現象　言語・コミュニケーション　場の情報

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究が始まった当時、言語やコミュニケーション研究の主流は、言語をそれが置かれている場から切り離し、語られたことばや書かれた文字だけを取り出して、これを「言語」として分析する方法が採られていた。しかし、ことばは、それが語られる場所において、具体的な意味を持つものとして発せられ、かつ、受け取られているのであり、ことばがコミュニケーション機能を担う限りにおいて、これが語られる場における様々な非言語的な情報と一体となって、その意味が伝えられるものではないかと考えられた。

(2) 他方、20 世紀の終わり頃から始まった複雑系科学は、様々な同期現象をはじめとする複雑系における自己組織化と呼ばれる現象が人間社会にも存在することを次第に明らかにしつつあった。Mr.O.コーパスを使った井出の先行研究では、同じ課題を達成するプロセスにおいて、この同期現象が日本語の会話者の合意形成を助けていることを明らかにした。また、部分を集めれば全体が分かるとする要素還元主義的な近代科学の方法には限界があり、個が全体に作用を及ぼし、逆に全体が個に影響を及ぼし、個と全体が相互に包み合うような相互作用が存在することが生物学を始め、多くの科学で指摘されつつあった。

２．研究の目的

(1) このような背景のもとで、新たにことばが話される具体的な場の中に言語をおいて、コミュニケーション全般を研究するという課題に取り組むことが必要とされたのであり、本研究の目的は、言語・コミュニケーションにおける場の理論を構築するという点にある

(2) これは、新しい課題であり、新たな理論的枠組みを構築する目的を持つものであるから、まずは、過去の言語及びコミュニケーション研究を振り返り、ことばが語られる具体的な場の視点を持つものを整理し、これまでの場の考え方を言語に適用して、言語学としての場の理論を構築するという点に重要な意義があり、これを解明するのが本研究の目的であった。

３．研究の方法

(1)言語・コミュニケーションにおける場の理論を構築するにあたり、まず、場の理論一般の考え方を整理し、その上で、これを言語・コミュニケーションにどのように応用が可能かを研究した。そのため、場の言語・コミュニケーション研究会を設立し、場の視点から考えられる研究を集め、多様な角度から、言語・コミュニケーションに場の考え方を取り入れるための方法を研究した。また、日本語と英語の違いを場の視点から明らかにすることによって、言語が場というものに深く規定されていることを調べた。

(2)そして最後に場の理論が日本特有のものではなく、普遍的なものであることを明らかにするため、欧米の言語学者・文化人類学者との間で、場の理論が日本だけではなく世界に通用する普遍性を持っていることを、欧米の学者と対談し、場の理論の基礎にある日本の場の思想を紹介する方法により、確認する作業を行った。

４．研究成果

(1)日本認知言語学会第 13 回大会(平成 24 年）において、「場の言語学とは何か」というワークショップを開催し、その中で場の言語学の

基本的な考え方を公表した。まず、岡は、「場の言語学と認知言語学－その統合と発展」と題して、認知言語学と場の言語学との差異性について、前者は、近代の枠組（個と因果関係、主客分離、自他分離）から完全に出てはいないのに対し、場の言語学は明確に個と因果関係ではなく、場と相互作用、主客分離ではなく、主客非分離、自他分離ではなく、自他非分離のパラダイムに立脚するものであることを明らかにした。

(2)そして、大塚は、「言語学における場の理論とは何か」と題して、場の理論の特徴として、個物は独立自存しているのではなく、絶えず場の中で他の個物と相互作用していること、全体は、個物の寄せ集めではなく、そこには場の自己組織機能があり、個物だけでは説明ができない現象があること、個物は生成死滅するが、その個物の置かれている場は存続していることを明らかにした。

(3)井出・櫻井は、「場の理論からみた言語」と題して、これを言語学に応用し、言語研究における場の理論の概念として、「内的視点」と「自己の二重性」を取り上げた。日本語の談話では、あいづち、うなづき、引き取り等の同調現象が頻繁に見られるが、これは、話をする二者の間に身体的リズムの同期現象であるイントレインメント（引き込み）が自他非分離的に働く結果であると考えた。人は、卵の黄身と白身のように、中心に自我を持ちながらも、自他非分離的なつながりを場の中に持っており、場の内部においては、このつながりが存在している。

(4)このつながりの一つが「身体」である。河野は、「場における身体性と言語」と題して、場の情報は、いわゆる暗黙知（暗在系）であり、記号化できない性質を持っているとの発表を行った。山口（2002）がフッサールの匿名的身体性の概念を援用し、乳幼児の自他非分離的な身体性の共有がコミュニケーションの素地となっていると指摘し、竹内(1998）がダンスのレッスン中に自と他が溶け合うような変貌を体験すると述べており、これは、複雑系における非線的な生成機能と等価な機能的特質を持つ同期現象が共空間内にいる人間の間にも生じることを意味していると考えられる。このような自他非分離的な身体的コミュニケーションの創出については、車椅子と操縦者との共働（三輪 2000)、組織体における暗黙知の共有による共創（Nonaka & Takeuchi1995)、在外企業における日本人と米国人との非言語的交流を基礎とする創発（Kono 2008）などにも見られる。また、ことばそれ自体が、呼吸、響き、リズム、生命活動と切り離せない身体性を持っており(鎌田 1990)、言葉の叙述機能が記号体系を超えた情意的同調作用を聞き手や読み手に惹起する(市川 1992)。これらは言語を道具とした身体のはたらきと見ることができる。

(5)翌平成 25 年の日本認知言語学会第 14 回大会では、「場の理論と日本語の文法現象」というテーマでワークショップを行い、場の理論からみた日本語の文法現象の特徴について発表した。まず、岡は、「場の理論と言語類型論」と題して、能格は、具格あるいは原因格が起源であるとする考え方(近藤 2005)を踏まえて、「風で扉が開く」など従来能格と言われるものが場所性を持っていることを明らかにし、場所的観点から「能動詞」「所動詞」という類型(三上 1953)を精緻化することを提案した。

(6)新村は、「直示用法の指示詞・人称詞にみる日英の「場認識」の違い」と題して、直示用法の指示詞・人称詞を通して、日本語と英

語とでは、「場認識」に基本的な違いがあることを明らかにした。すなわち、日本語では、直示用法の指示詞も、人称詞も、話し手が対象を現場に位置づけてとらえる表現であるのに対して、英語の場合には、対象を脱現場化し、抽象化してとらえる表現であることを示し、日本語話者の場認識は発話の現場にあるのに対して、英語話者の場認識は抽象的「談話の場」にあることを明らかにした。

(7)櫻井は、「言語獲得にみられる事態把握と場の言語学」と題して、Frog Story を通して、言語獲得に見られる事態把握が英語と日本語とでどのように異なるのかを明らかにした。すなわち、3 歳児においては、日本語話者も英語話者も、他動的関係を捉えることをしないが、英語話者は、5 歳児及び 9 歳児においては、英語特有の他動的関係を表現するようになり、同年齢の日本語話者は同年齢においても、事態を場にあるがままに捉えて他動的に捉えないのである。つまり言語獲得の初期の段階では、英語話者も日本語話者と同じように事態を他動的ではなくあるがままに捉える見方をすることを意味していると考えることができる。

(8)小柳は、「存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析－場所の焦点化はどのような構文と意味を創り出すか」と題して、存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析を行った。BE 存在と BE 所有とは、「場所」と「参与者」を関係付ける最も基本的な概念であり、その違いは両者の把握の違いによる。存在が基本にあり、「人との関連付け」「場所の焦点化」のいずれか又は双方によって BE 所有が生まれると考え、BE 存在スキーマから BE 所有スキーマへの拡張する事態認知モデルを提案した。

(9)以上のような研究を踏まえて、大塚は、カリフォルニア大学バークレー校の言語学・文化人類学の教授であり、2013 年に同校に設置された Social Science Matrix の Director である W.ハンクス教授との間で場の理論についてメールの交換をし、2014 年 3 月、来日したハンクス教授と大塚との間で、場の理論について対談を行った。その結果については、ハンクス教授がフランスで講演され、論文を通じて公表される予定であるが、そこでは、次の点が確認された。すなわち、言語・コミュニケーションの本質を明らかにするためには、従前の要素還元主義的な方法による分析だけでは不十分であり、主客非分離性（身体性）、自他不分離性（二重生命的な存在性）を踏まえて考察する必要があること、その解明に当たっては、複雑系における自己組織化ないしは自己組織の考え方が重要な意味を持っており、従来の研究方法を見直す必要があるということである。

(10)この 3 年間の研究において、場の理論の基本的な考え方が構築され、これが場の言語学あるいは、場所の言語学として、言語・コミュニケーションの探求においても有効な考え方であることが明らかになったと考えている。そこで、我々は、本研究発表に新たに参加したメンバーを連携研究者、研究協力者に加え、更に上記ハンクス教授も研究協力者として、言語・コミュニケーションにおける場の理論の発展をテーマとした研究活動を引き続き行うこととなった。従来の研究方法では捉えることができなかった領域に入り込むため、これを具体的にどのような方法論を用いて探求するのかについても難しい課題を抱えているが、これまでの研究には見られない新たな知見を付け加えるものであり、この新し

い場の理論をより精緻にし、日本語教育、英語教育など実用的な分野においても有効な理論を提供していきたいと考えている。

５．主な発表論文等

［雑誌論文］（計 11 件）

① 岡智之、「場の理論と言語類型論」、日本認知言語学会論文集第 14 巻、査読無し、2014 年（印刷中）

② 新村朋美、「直示用法の指示詞・代名詞にみる日英の「場認識」の違い」、日本認知言語学会論文集第 14 巻、査読無し、2014 年（印刷中）

③ 櫻井千佳子、「言語獲得にみられる事態把握と場の言語学」、日本認知言語学会論文集第 14 巻、査読無し、2014 年（印刷中）

④ 小柳昇、「存在スキーマを基本とした日本語の自他交替構文の分析－場所の焦点化はどのような構文を創り出すか」、日本認知言語学会論文集第 14 巻、査読無し、2014 年（印刷中）

⑤ 大塚正之、「日本語の文法・談話と場の理論」、日本認知言語学会論文集第 14 巻、査読無し、2014 年（印刷中）

⑥ 岡智之、「イメージ日本語文法の可能性―江副文法の批判的検討を通して―」、東京学芸大紀要、総合科学系Ⅱ第 65 集、査読無し、2014 年，pp.497-504

⑦ 井出祥子・櫻井千佳子、「「場の理論」から見た言語」、日本認知言語学会論文集第 13 巻、査読無し、2013 年、pp.612-617(全体 pp.706)

⑧ 岡智之、「場の言語学と認知言語学―その統合と発展」、日本認知言語学会論文集第 13 巻、査読無し、2013 年、pp602-607(全体 pp.706)

⑨ 大塚正之、「言語学における場の理論とは何か」日本認知言語学会第 13 回論文集、2013 年、pp.608-611(全体 pp.709)

⑩ 井出祥子、“Roots of the wakimae aspect of linguistic politeness: Modal expression and Japanese sense of self” Pragmaticizing Understanding: Studies for Jef Verschueren. Michael Meeuwis and Jan-Ola Ostman、Amsterdam: John Benjamin Publishing Company、 巻号なし、査読無し、2012 年、pp.121-13

⑪ 岡智之、「日本語の主語、「は」と「が」をめぐって－「場所論」の観点から」、iichiko No.113、pp.92-108、査読無し、2012 年

〔学会発表〕（計 9 件）

①岡智之・櫻井千佳子・大塚正之、場の理論と日本語の文法現象、日本認知言語学会、2013.9.21　京都外国語大学

②井出祥子、Rethinking *Wakimae* Aspect of Linguistic Politeness in terms of Ba Theory:The Case of Person Referents, The 13th International Pragmatics Association 2013.9.10 India Habitat Center, New Delhi, India

③ 井出祥子、Rethinking Linguistic Politeness From the Perspective of Ba theory, Workshop on Emancipatory Pragmatics 2013.1.4 UC at Berkeley. USA

④大塚正之・井出祥子・岡智之・櫻井千佳子・河野秀樹、「場の言語学とは何か」 日本認知言語学会、2012.9.8、大東文化大学

⑤井出祥子、場と日本における英語教育　、

第51回JACET(大学英語教育学会)大会シンポジウム、2012.9.1 愛知県立大学長久手キャンパス

⑥井出祥子、Ba oriented perspective and language practice: An attempt to emancipatory pragmatics. Conference celebrating Professor Robin Lakoff's retirement, 2012.5.4, University of California at Berkeley

⑦ Sachiko Ide 、"Ba oriented perspectiveand language practice"、International Workshop on linguistics of *BA*, 2011.12.10 ,Waseda University

⑧Masayuki Otsuka、"On Ba-Theory"、International Workshop on linguistics of BA, Waseda University 2011.12.10 Waseda University

⑨大塚正之、「場の哲学～場の思考とは何か」電子情報通信学会　思考と言語研究会（ＴＬ）2011.11.26 早稲田大学

〔図書〕（計5件）

① 岡智之、ひつじ書房、『場所の言語学』、2013年、296頁

②井出祥子・藤井洋子編著、くろしお出版、『解放的語用論への挑戦―文化・インターアクション・言語』、 2013 年、p.193(pp.1-32)

③ 大塚正之、晃洋書房、『場所の哲学～近代法思想の限界を超えて』、2013年、129頁

④ Sachiko Ideほか 『Mouton Gruyter Honorifics and address terms』(pp. 34-78), Pragmatics and Society、2011年

⑤ 井出祥子ほか、みすず書房、『異文化コミュニケーション学への招待』、「サステイナブルな地球のための異文化コミュニケーション」 2011 年、pp.484(pp.247-268)

〔その他〕

場の言語・コミュニケーション研究会
Http://banogenggo.com/

６．研究組織

(1) 研究代表者

大塚　正之(OTSUKA, Masayuki)
早稲田大学・法学学術院（大学院法務研究科・法務教育研究センター）・教授
研究者番号：４０５５４０５１

(2) 研究分担者

井出　祥子(IDE, Sachiko)
日本女子大学・文学部・客員研究員
研究者番号：６００６０６６２

岡　智之(OKA, Tomoyuki)
東京学芸大学・留学センター・教授
研究者番号：９０４０１４４７

櫻井　千佳子(SAKURAI, Chikako)
武蔵野大学・環境学部・准教授
研究者番号：３０３８６５０２